

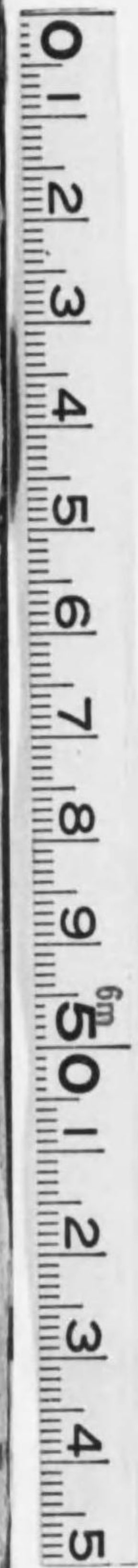
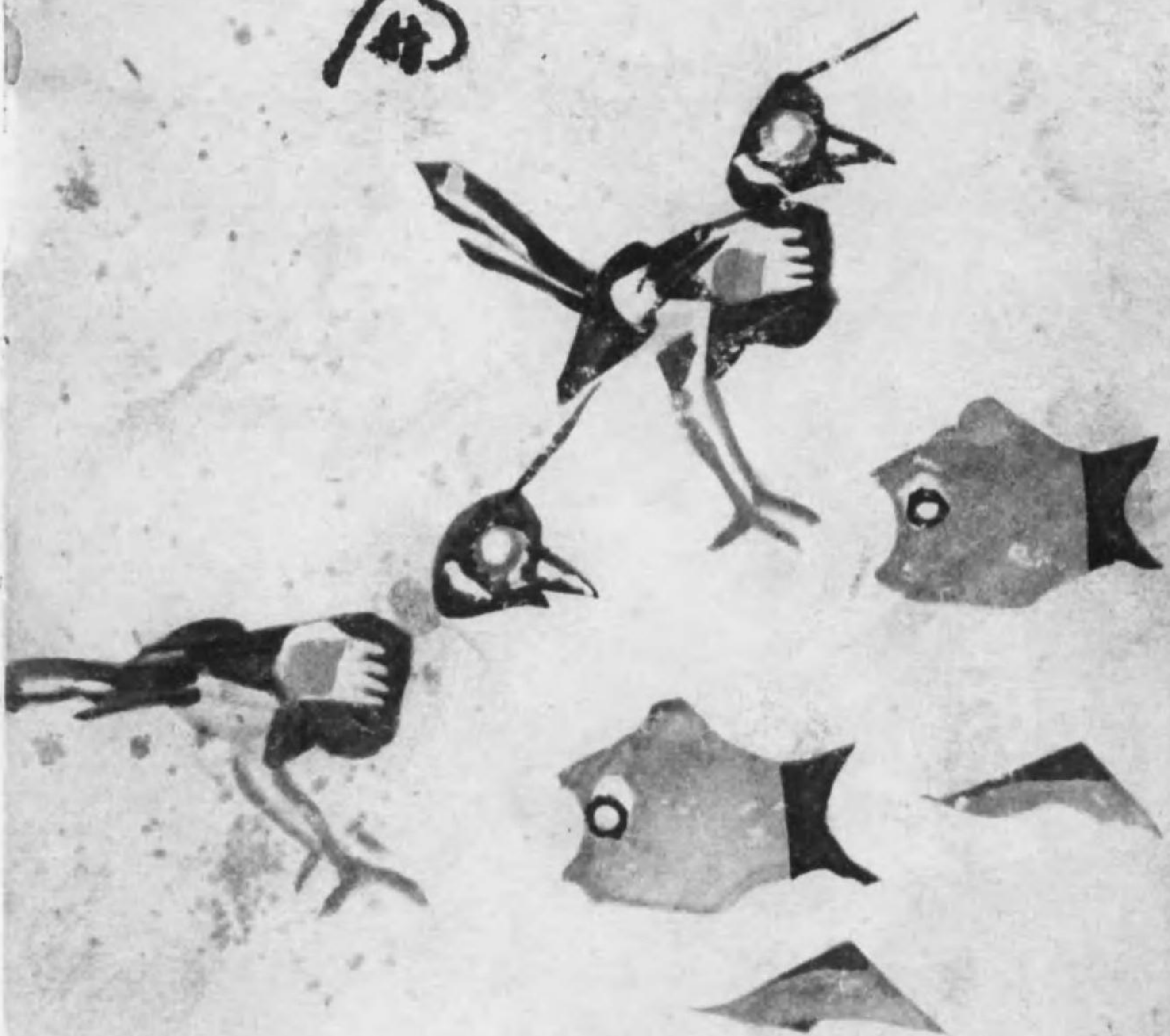
911.56
N93

911.56-N93-4ㄅ



1200500756798

八
龍
頌
百
壽



始





911.56
N93
4

野口米次郎詩集

八
歌
公
頌
一
百
廿
六
冊

富
山
房
版





筆治嗣田藤

嵐

9805
78

序に代へて

日本の詩精神

私共詩人は所謂俳人や歌人とは、内容の盛り方や表現の手法に於て異つてゐるが、美と誠を信じ、同じ詩歌の住者である以上、それ等の人々と違つた所がある筈はない。私共も今日、數千年來滾々として流れて止まない傳統の聖水を汲んで、發育し來つたもので、特に大東亞戰下に於ては、外に峻嚴にして強力な詩的陣營を張ると共に、内に純雅一徹な感情に生きんとするものである。まことに、祖國の威武を歌つて、戦果を稱へもつて、國家の偉大をいやが上に高めることが、私共の報國の道でなくて何であらうと思ふのである。決死の丹心を提げて、敵陣に臨む戰士の譽はいふまでもないが、文字に祖國精神を高唱して、國家の重大な

使命達成に協力せんとする詩人の仕事も、等しく尊い筈だと私は疑はない。

今私共の胸中に希望と光明が、夏の雲のやうにむくむくと沸くやうに覺える。私共は、天馬空を征くの概をもつて更に一段の飛躍をしなければならぬと思ふ。かくて私共は、この重大時機に際會して、立派に日本臣民として一職責を解除したいのである。國家は全力を賭して、長い間東亞細亞を蔽つて來た米英の惡雲を破つて、東亞諸民族に新しい生活を與へ、もつて共存共榮の實をあげんとしてゐる。この時に當つて、私共に正しい知識と豊かな感情がなければ、その目的は仕遂げられないであらう。そして私共詩人の任務も重大であることを自覺しなければならぬと思ふのである。

昔源太景季は、箴に今は盛りの梅の花一枝をさして、平家の軍勢十萬餘騎の一の谷へ先陣を切つたといふことだ。梅は百花の魁であつて、後から續く春の爛漫を豫言するであらう。さればこそ梅花一枝を箴にさして先陣を勤めた勇者の心境も想像されるのである。若し私共詩人が詩歌を提げて、先驅者の任務に就かねばならないならば、私共は挺身して將來に生きる勇者の氣魄がなければ

ならないと信ずる。そして私共は、若しや仕事半ばに斃れたならば、その時バトンを次に續く詩人に渡せばよいと覺悟あつて然るべしだ。私共の詩歌報國は自分に價値があると思つても、世間からは認められないかも知れない。然しこの時私には心にいふであらう、『私共の仕事は神の前でしてゐるのだ、世間からの感謝は、私共の目的でない。』かくて、詩歌の愛國奉仕はいつまでも續いて、山川草木と共に盡きる所がないであらう。

私は日本に詩歌の物語が澤山あつて、世界に比類のないことを誇りとする。これを思ふ時、私は流石は詩歌の國だけであると喜ばざるを得ない。そして私は取り分け、『さざなみや志賀の都はあれにしを』の作者、平忠度のことを思ふのである。私はこの歌が優れてゐるといふからでなく、それに關はる一場の物語が、忠度最期の心境を明かにして、私共を肅然と襟を正さしめるからである。かくも全盛を極めた平家一門は、今没落して都をあとに西へと死所を求め、最後の陣を生田の森と一の谷との間に敷いた。平家の大將忠度は、途中から再び都へと取つてかへし、歌人俊成の許をたづねた……夜は更けて聲がない、俊成の邸内は、

『平家の落人がやつて来た』といつて騒がしくなる。流石は三位俊成卿だ、『苦しくない、早く門を開いて内へお迎へ申せ』と命する。門の門はぎいと開く、忠度は内に入り、俊成と對面する。

この時忠度が俊成に云つた言葉が、平家物語にかういふ風に出てゐる。『先年申し承りてより後は、ゆめゆめ疎略を存せずと申しながら、この二三年は、京都の騒ぎ國々の亂出て來、剩へ當家の身の上に罷り成りて候へば、常に參り寄ることも候はず。君既に京都を出てさせ給ひぬ。一門の運命、今日はや盡きはて候。それに就き候うては、撰集の御沙汰あるべき由承り候ひし程に、生涯の面目に、一首なりとも御恩を蒙らんと存じ候ひつるに、かかる世の亂出て來て、その沙汰なく候ふ條、唯一身の歎と存じ候。この後、世靜まつて撰集の御沙汰候はば、これに候ふ卷物の中に、さりぬべき歌候はば、一首なりとも御恩を蒙りて、草の蔭にても嬉しと存じ候はば、遠き御守とこそ參らせ候はんすれ。』

これを今日の言葉で、平たくいふとかうである、『心ならずも御沙汰致しました。この二三年間は、都を始め國々も騒がしく、私は平家一門の武士とて、おたづ

ねなどしては、却て御迷惑であらうと思つて、御遠慮申上げた次第で御座います。天子様も早や都落ちを遊ばして、私共一門の運命は旦夕に迫つて居ります。いっぞや撰集の御沙汰が下つたと承りました時、せめて一首でもお入れを願つて面目にあづかりたいと思つてゐましたが、かう世が騒がしくなつては、それも御中止の事と想像いたします。然し今後、世が靜まつて撰集御實行の場合もあらば、ここへ持參致しました歌のなかから、一首でもお撰みを願ひ幸にお入れ下さらば、忠度死後の名譽これに過ぎないと思ふ次第で御座います。』

忠度は私が前にいつた『さざなみや志賀の都はあれにしを』の歌をふくんだ百餘首の歌を書いた原稿を、鎧の袖のしたから取り出した。三位俊成は、それを涙なしに受取ることが出来なかつた。忠度は今この世に思ひ置くこと更になしと、立ち上り、『骸を野山に曝さば曝らせ、憂名を西海の波に流さば流せ』と叫んで、さらばさらばと兜の緒をしめ、馬に跨り一の谷さして俊成に分れた。

俊成は門まで忠度を見送つて、しばらく彼の後姿を眺めた。忠度は、『前途程遠馳思於雁山之暮雲』と朗詠集中、大江朝綱の詩を高らかに吟じながら、馬を驅つ

た。俊成はその聲が夜風に送られて來るのを聞いた。ああ、何といふ悲壯な場面であらう。これぞまことに世界に於ける詩歌物語中の白眉であつて、忠度は平家没落の彼方に、燦然として輝いた詩歌のモニュメントを立てたのである。彼は死を超越して、詩歌の世界に解放と自由を完全に確保したのである。彼は詩歌の功德によつて、永劫の人となり、八百年後の今日になつてもなほ、私共の心に潑刺と若々しく生きながらへ、靈感の烽火となつて物質的暗雲を劈いてゐるのである。まことに、偉なる哉大なる哉詩歌の力やと、私は叫びたいのである。忠度は平家の武士として一門と共に亡びたが、その悲劇は彼の人生を一層に意味の深いものにしたのである。彼は人間として、運命を選択する権利を持たなかつた。然し彼は、詩歌から永劫の尊い生命を拾つたのである。

正しい智と感情にめぐまれた人間だけが、詩歌の世界に入ることが出来る。まことに詩歌の世界は、悠久にしていつも若い。忠度は西海の藻屑となつた時、年齢五十位であつたが、『さざなみや志賀の都はあれにしを』の歌を讀む時、私共は眼前に年若い歌人のみやびた姿を見るやうに感ずるのである。

詩歌の世界は、不老不死の永劫國であつて、私共はそれに入つて若さを與へられることは當然である。若し私共が、若さの支持によつて人生の饗宴に侍る恵にあづからないならば、私共の智も感情も鈍り硬化して、美と誠に答へることが出来ないであらう。若し私共が、若さから遠ざかつたならば、私共は人間の生きる權利を捨てて、生活の新體制もまた無から有を生みだす創造も到底期することが出来ないであらう。今日大東亞戰下に於て、私共は全東亞の解放と幸福に向つて邁進してゐるが、日本が永劫の青年國であつて、詩歌をその精神的基礎としてゐる以上、必ずやその目的を達成するであらうを私は疑はないのである。私は日本の國民一億のもの皆な詩人であらねばならないと思つてゐる。私はその一人であることを喜んで、決して特殊な高い地位を要求するものであつてはならない。さもないと私は他の九千九百餘萬の人々から離れて、その奨励と好意を受けることが出来ない。私は水の一滴となつて、同胞諸君と共に滾々として流れて止まない大きな川を作つて、新しい體制と秩序を整へて行きたいのである。私は豫言者でなく、普通の日本人として、東亞更生の大運動に一つ地

位を引受け、將來に生きんとするものである。
昭和十八年八月

野口米次郎



八絃頌一百篇

目次

序に代へて

第一部

神風萬里……………	二
祖國禮讚……………	五
米英擊滅歌……………	八
聖戰第二年・伊勢大神に跪く……………	二一
八咫御鏡……………	二四
神風競ふ……………	二七
招魂の儀……………	二九

淨間の花火	三
彈丸	二四
牧野中佐	二七
戦車兵魂	三〇
死地に乗入る二千數百	三三
Two thousand in the valley of death	三六
故山本元帥挽歌 一	四一
故山本元帥挽歌 二	四七
軍神加藤讚仰 一	五〇
軍神加藤讚仰 二	五七
軍神加藤讚仰 三	六〇
シドニー特殊潛航艇の贊	六三
東亞進軍譜	六六
落下傘部隊 一	六八

落下傘部隊 二	七一
天かける靈鳥	七三
砲撃	七六
潛艦一撃	七九
ラングーン爆撃	八二
血を捧げるハイビスカス	八五
マライ夜營	八九
マニラ陷落	九二
シンガポール陷落 一	九五
シンガポール陷落 二	九九
偉業百日に成る	一〇三
明治神宮參拜	一〇七
軍神	一一〇
砲煙彈雨の贊	一一三

飛行機……………二六
屠れ米英われ等の敵だ……………一九
無敵軍……………二三
神護國……………二四
終りなき聖業……………二六
我が日本國……………二八
帚星……………三三

第二部

神嘗祭……………三三
瑞祥降下……………三九
天下の秋……………四三
大東亞佛教青年大會の歌……………四五
興福寺龍燈鬼……………四八

新薬師寺伐折羅大將……………五一
銅よ鐵よお召しだ……………五四
樹木應召……………五七
梵鐘應召……………六〇
脱皮の凱歌……………六三
萬法流轉……………六五
陣形……………六七
永劫の天兵……………六九
心境……………七二
諧律……………七五
破壊……………七八
辻詩 太陽の子……………八二
乾坤一擲……………八五
黎明の門を開かん……………八七

廢墟の聲	一九〇
道一筋	一九三
銃後の守備	一九五
戦史の語らざる戦役	一九七
空中の聲	二〇一
大戦果發表	二〇三
號外賣	二〇五
國府の宣戰布告	二〇八
ビルマ行政府長官一行を迎ふ	二一一
歡迎の辭に代ふ	二一四

第三部

死の褥に横たはる時	二二八
宣言	二三二

飛龍	二三四
海の子	二三七
勝利者	二三〇
洗滌	二三三
死の晴着	二三四
時と空間を超越する者	二三七
英國・罪惡の追加	二三九
印度、月を失ふ	二四三
印度	二四七
藝術の祭典	二五一
人魂	二五三
拈華微笑	二五五
第二の思想	二五八
殺人鬼	二六一

八絃頌一百篇



蟋蟀	二六三
臨海の氣	二六五
眼光	二六八
蜘蛛	二七〇
宋代深紫色圓鉢	二七三
歌舞伎女形	二七四
能面孫次郎	二七六
橋掛	二七九
百萬を見る	二八一
哨戒機	二八三
天の浮橋	二八五
花	二八七
笛の音	二九〇
虹	二九三



第

一

部



神風萬里

去年の今日、十二月八日、
詔勅降るや金鷄高く飛んだ。
聲鏘々として大空を貫き、
國土の邊陲、卒土の濱に至るも、
民有らん所凡てに天意を降らした。
『起てよ撃てよ』の叫、
山々へ木靈し野は野に答へ、



我等一齊に必勝必滅の聖途に上つた。
この時夜陰の鶴、黒衣の汚鳥、
邪智と野心の聲を失ひ、
暴戾の爪を納めて醜姿を隠した……
ヒリッピン、マライ、ジャワ、外夷罪惡の牙城續いて落
ち、
東亞の世界仰いで天日を拜するに至つた。
されど今日、去年の今日の如くに、
金鷄鏘々たる聲、なほ『起てよ』を叫んで止まない、
必勝必滅の意氣を叫んで止まない、
英雄の蹶起を叫んで止まない。
見よ、暗雲天に重なり威嚇と呪詛を擬して迫らんとする、
見よ、殉國の英靈神祠を排して山野に幻の陣を張る、



用意の隊伍整然……言葉無けれど號令一下、我等を導かんとする彼等の聖斷は何か。ああ、誰が戦争のいつ盡くるかを知らう、我等は第二ヒリッピン第二マライ第二ジャワあつて、我等を拐さんとするを知らねばならない……最後の棕櫚の葉、我等擱まんとすれば遠ざかりゆく。我等は終り無き使命に應召せるを知らねばならない……聖戦はいつまでも彼方彼方へ延びゆく。されど決意我に存す我等追はねばならない、我等は永劫の天兵、戦つて疲れを知らない神風萬里だ。



祖國禮讚

我等は太古の昔より存在の意義を糺明し、知識を性能もて統一し、凡てを祖神に捧げ來れり、ああ、わが祖國よ。

祖神は我等を勵まし、指揮し給ふ、我等は力の泉として祖神を恐れ敬ひ來れり、ああ、わが祖國よ。



我等一旦緩急あらば、常の経験と感情を越え、
祖神の御魂と合一し、御魂われ等の酒杯を充たし給ふ、
ああ、わが祖國よ。

我等死を恐れざるは、生命が捨つるものの最初にして最
後なればなり、

我等貧しくして生を捧ぐるの外他を知らざるなり、
ああ、わが祖國よ。

我等唯一無二の祈は祖國愛あるのみ、玄の玄なるもの、
山頂の風の如く峻巖、犠牲のみぞ知る喜祝なり、
ああ、わが祖國よ。



我等祖國の歌を唄ひ稱へ、それに依つて我等永劫を攀り、
迷ひなく祖神の御前に自らを横たへるなり、

ああ、わが祖國よ。

我等祖國の歌を稱へ唄ふ、山川草木我等に和するを見、
ここに於て天地人の妙なる管絃樂始めて全きを知る、
ああ、わが祖國よ。



米英撃滅歌

天に代つて、敵を打つ、
 金鶏は叫ぶ、われ答ふ、
 空を極めて、雲を抜き、
 大地を蔽ふ、義に生きる、
 米英撃滅、時は今、
 罪膺懲の、樂は鳴る。



ああ聖戦の、火は燃える、
 搾取陣營、影薄し、
 戦車は唸る、國かたく、
 飛行機舞つて、命は出づ、
 米英撃滅、時は今、
 山河轟く、曲高し。
 高鳴る胸よ、肉躍る、
 打ちてし止まむ、無禮國、
 船を誇らば、挑み來よ、
 海は千尋の、墓を掘る、
 米英撃滅、時は今、
 策動欺瞞、蹴つ散らせ。



恥無きものは、死を急ぐ、
 吠える怯懦の、犬の群、
 神を恐れて、蹲り、
 わが天業に、死を期せよ、
 米英撃滅、時は今、
 悪鬼を屠る、凱歌飛ぶ。

註 本曲は松竹大船塀影所のため作れるもの。



聖戦第二年・伊勢大神に跪く

太鼓橋を渡れば五十鈴川清し、
 紅葉の秋松の間に錦を飾る。
 坦々たる参道に玉砂利眞珠を欺く、
 障壁の杉漸くにして肅たり嚴たり……
 我等容を改めて社殿に跪く、
 聲を失ひ默然として神託を乞ひ奉る。
 我等思想の配置を清め、



心を枯淡に還元し、
複雑を純一に壓縮蒸溜し、
散漫を要約して一つの表徴、
一あつて二なき聖約に律するもの、
おお大神よ、國祖よ、
我等畏み八紘一字の神意に則り、
詔勅『起てよ』の綸言を奉戴して、
敵暴戻不遜を退治して一年に及べり。
されど聖戰第二年を迎へるこの今、
なほ我にまつろはざる國あり、
また我等に欺瞞變幻の捨離すべきもの無きにあらず、
しかして強調百歩を進める要迫るあり、
我等遠く旅して今御前に跪く、



おお國祖よ、大神よ、
我等神託に答へ創造の義を再確立せざる可からず。
我等に決意の脈々として搏動し、
我等に必勝必滅の筋肉動くを疑はざるも、
理想完遂に正しくして無碍自在なる感情と自制、
更に神韻渺茫たる天意の加護無くんばあらず。
おお大神よ、國祖よ、
願はくは我等の足らざるを補ひ給へ、
我等の制限を無制限たらしめ給へ、
我等人力の區劃を捨てて、
放膽なる天馬空を往くを得せしめ給へ。



八咫御鏡

私は今玉砂利を踏みながら、
 海濱の平靜を想像する。
 私共が祖先は、大水の亂舞に勝つた後、
 聖業を林中に追つたことを想像する。
 更にまた、彼等が廻瀾怒濤を木の間に想像して、
 智と勇を將來に備へたことを思ふ。
 私共が祖先は徒に地を穿つて、



浮島や架橋の遊戯を偲ばなかつた。
 彼等は亭々たる大樹の伴侶、
 高く大空の虹を仰いだ。
 彼等は巨人、
 實に參道を抱く杉の如き巨人、
 健剛寂莫な巨人、
 思想を一つに壓縮して神祕に合した巨人……
 ああ、神苑の森嚴にして清淨なることよ、
 ああ、神苑の昂低起伏を知らざる何たる靜肅さよ、
 ああ、漫々たる無限な生命の脈搏よ。
 見よ、東南神路山を擁し、
 五十鈴川神苑の裾を洗ふ。
 斧鉞を入れざる千古の樹木は、



相並んで哨兵を擬し、
默然として直立不動の形を作る。
私共は神託の樹間を飛んで、
金鷄の如くに悠久たるを思ふ。
私は徐に歩を進めて社殿に近づき、
玉垣に添つて身を屈する時、
心に千里を旅して山頂に到るを覺える、
旭日煌々として東天を破るを覺える、
否な、八咫の御鏡、
燦として照渡り、
八紘爲宇の御啓示、
いや榮に普きを覺える。



神風競ふ

時と空間を越える國、
これを第四次元の世界といふ……
燦たる靈光紅を流す國だ、
運命に呼ばれて國生みした世界だ、
神祕なしに誰かこの神話國に入ることが出来よう、
歴史はどうしてかかる國の出現を豫期したてであらう。
ああ、聞け、神風競うて『撃ちてしまむ』を叫ぶ……



我にあり源九郎相模太郎、東郷乃木あるは山本五十六、
されど彼等は誰も一人だけの男でない。
聖意我等の凡てを坩堝に解體して、
合一集結の人作りした時、
我等個性を捨てて共通の義烈を叫んだ。
我等は必滅の靈火と飛んで天を焦すを知つてゐる、
不義は我等に手を觸れることが出来ない、
我等は神祕、報國滅私の魂だ。
ああ、我等神風に米英撲滅を叫んで天空を往く、
『撃ちてし止まむ』の百雷落ちるを見て、
米英墓標となつて朽ちると觀念するや否や。



招魂の儀

昭和十八年四月二十二日夜謹作

英柱一萬九千九百八十七、
尊くも護國新神に鎮まり給ふ。
今宵櫻花、神苑を辭して跡なく、
悲風蕭々、聲を潜めて盡忠の頌を唄ふ。
この夜、この時、天翺け來る英靈、
陸に海に星散する戦營を神籬に代へるに當り、
最後の對面を遺族と分たんとするなり。



見よ、招魂齋庭の篝火、
四脚臺上、白木造りに清き御羽車に映じ、
先づ森嚴の氣、跪坐の遺族を蔽ふ。
警蹕の聲、菅搔の音、
起つて中空に波動するは、
英靈來りませの聖意を傳へる如し。
越天樂の歌曲終つて、
祭典の宰司徐に神詞を誦する時、
我等は英靈既に御羽車に坐するを知る。
壯音『水漬く屍』の律動に招かれ、
靈車は淨闇を破り始める。
ああ、時ならぬ暴風雨來だ、
否な炸裂の拍手、



涙遺族を洗つて靈車を追はんとす……
老いて眼霞める老翁老嫗、いたいけな幼童、
忘れ形見を愛の胸に抱く若い母、
ああ、我が子行くよ、我が父行くよ、
我が懐しの夫……
彼等靈車に従つて呼號せんとすれど、
神前を識して自律せざるを得ない、
彼等は伏し拜み、
ただ萬感の情に漂流するのみ。



ああ、別れを告げる火の手振、
彼等に答へる唇の閃光……
瞬間の啓示終つて、
寂寞天地を閉ざし、
靖國の神苑聲を知らない。
呆然たる遺族のもの、
闇黒のなかに、
英靈の唇を追ふ、
火線の手振を求めぬ。



浄闇の花火

浄闇の爆音、
天を破る烽火……
遺族十萬聲を吞んで天を仰いだ。
彼等はこれに兄を、
弟を、甥を、
否な父を見た……最後の聲、
殉國の叫を聞いた、訣別の血を見た。



弾丸

弾丸、命中を誓つて唸る……
誰が彼の速度の快感を味はつたであらう、
誰が彼の爆裂の叫びを體驗したであらう。
敵は慄き、恐れ、周章狼狽、ばたと倒れ、血に滲む、
必勝必滅は彼の誇りだ、
決死、全靈全身を捧げての大仕事……
挺身だ、自己抹殺だ、



弾丸は人を斃すに自分を亡ぼしてかかる、
怯懦は神の卑しみ給ふ所、彼の所有でない。
ああ、誰が彼の破壊を非難するだらうか、
彼に破壊を見て創造を見ざるは、人生の敗残者だ。
彼は一丸一丸に新しい世界を生みだしてゆく、
彼の唸りに恐怖だけを見んと欲せば、弾丸はいふであら
う、
『よろしい、存分に見せてやる。』
弾丸の期する所は眞實な人生への地均しだ、邪魔取り退
けだ、
白紙への還元だ、神世界を作り給うた當初への復歸だ。
人間は地上を遊び過ぎた、互に壟斷し合ひ泥仕合に暮れ
た、



大地の恵に狎れすぎた亂用した。
彈丸は憤怒を實施して神に替る、彼は叫ぶ、
『私慾を恣にして天を恐れざるもの、一舉殲滅あるのみ
だ、
鞠躬如として己を知るもの、我が友だ。』



牧野中佐

廻り來る十二月八日、甥牧野三郎の思出や
切。彼は布哇真珠灣爆撃飛行勇士、功上聞
に達し位二階級を飛ぶ。

人はいふ、『一家一門の譽だ。』
人はいふ、『真珠灣の勇士、美名千載に傳はる。』
だが私には一箇渺たる甥、牧野中佐三郎、
炯々たる眼光、鋼鐵作りの小さい體軀。
彼が徐州夜戰参加から生還した時、
彼は私に眞赤な血の池と眞黒な氷に凍つた大空を語つた。
そして彼はこの二つを繋いだ荒鷲姿を私に想像させた。



然し今私共一族は貪慾な所有の指で彼を汚すことが出来
ない

彼は永劫に祖國を守る空の軍神だ、

幻の飛行將校、牧野三郎！

十二月八日、詔勅に答へ奉り、

彼は第二次爆撃の指揮を承はつた、

米艦の盲射砲火、否な血染めのスコールどん真中に突入

した……

ああ、戦史は嘗てこの悲壯を知らなかつたであらう。

だが私は想像を禁じて身の毛を彌立てない、

涙の物語は英雄に迷惑だ。

私は彼の空中散華に萬歳を叫ばねばならない。

私は彼が『今度こそ男子の死所だ』と決死一番、



怒濤太平洋を飛んだことを想像する。

一氣祖國の運命を好轉させるの決意敢然……

ああ、牧野三郎、汝は日本男子だつた。

家毎に勇士を出して今度の戦争が銘々のものになる、

挺身を集積して最後の勝利を築かねばならない、

意氣は犠牲の數に従つて増大しゆく、

國土一つに滅私奉公の總進撃、

悲壯な熱涙なしに我が使命達成は期せられない。

私は今日町の葬儀屋の前を通る、

匆忙蓮花を擬造し、板を削り釘して棺桶を作つてゐる、

人間死なき能はずだ、日毎夜毎に亡骸は土壤へ急ぐ。

だが疊上の死は男の恥づる所、

牧野三郎、汝は堂々神州男子の沽券を中天に憂飛ばした。



戦車兵魂

一

日盛りのベギュー平野は、
濛々として熱の土砂降りだ。
なかに進む戦車は盲の大芋蟲、
何といふ逞しい鋼鐵の肋骨だ、
ばりばり雑木を噛んでは捨て噛んでは捨ててゆく。
敵見える！ 保護色の戦車はるか彼方に七台、十台、四



十台、

とぐろを巻いて機を狙つてゐる。
わが青年伍長自若として火器を丁寧に調べる、
この瞬間彼の頭腦をびかりと掠める、
學校卒業式に戦車教官の與へた訓示、
『死して任務を全うせよ！』

二

バーン、バーン！
ヒューン、ヒューン！
どろっとした空気を破る金屬性の叫音、
地上より舞ひ上る熱砂の旋風。
伍長が應戦の引金をひく指は震へる、



『敵の側面突破だ』……小隊長の號令が飛ぶ。
戦車は陣列を變へる、肉弾戦だ、
この時戦車十餘敵はわが隊長戦車を目かけ、
我等の懷中に飛び込んで来る。
敵御參なれ！ 伍長は側面から浴びせる集中砲火、
敵車二台、三台、五台を見事火焙りにかけた、
だが無念、彼は殘餘の包圍から隊長戦車を救ふことが出
來なかつた、
隊長は丸を腹部に受けてばたと二つになつた。
『彈丸は無駄だ、突込め突込め！』
小隊長が叫ぶ途端に、敵の一丸ヒューンと飛ぶ、
伍長の戦車に中つた、伍長は煽りを喰つて卒倒した。



三

伍長は小隊長殿小隊長殿と叫ぶ……答がない、
ああ、小隊長の兩腕はどこにある、眼はどこにある？
伍長は立ちあがらうとしたが立てない、彼は膝骨を抜か
れてゐる。
車内の炸裂が愛車の機能を奪つた、火器は役をしない。
伍長は敵車の近づく音を聞く、
ざくりざくりと鎖が落ちる音を聞く、
索引綱を投げる音を聞く。
この瞬間彼の頭腦をびかりと掠める、
學校卒業式に戦車教官の與へた訓示、
『死して任務を全うせよ！』



伍長は小隊長の死骸にすり寄り、両手を合せて叫んだ、
『御安心下さい、捕虜なんかなるもんですか、日本男子
です！』
彼は決然と舌をかみ切つて横に崩れた……
伍長の二つの眼だけはかつと敵車を睨んでゐる。

註 昭和十七年三月十六日讀賣は『死して任務を果たす』の見出しで
『原田敬一伍長の悲壯な自決』を報じてゐる。私はこのビルマ戦役
の一挿話を讀んで感慨無量、新聞記事によつて本篇を作る。



死地に乗入る二千數百

最後の命下つた、
彼等は死地に乗入つた、
ああ、阿修羅の勇士二千數百、
どの戦史も未だこの悲壯を語らぬであらう。
夜襲肅々、
一人も恐怖を知らない、
敢闘は彼等の有だ、



國に捧げる盡忠魂、
彼等は死の進軍だけを知つてゐる。
右、左、
前、後、
爆彈の嵐、
砲火の雷は唸つた、
絶海の闇夜は地獄を作つた。
ああ、悲壯、殉國の勇士二千數百、
萬歳の叫と共に、死地に乗入つた。
悪鬼の稻妻は濃霧を裂いた、
羅刹の怒號は荒波を壓した。
ああ、我が血戰勇士二千數百、
燦たる火の玉、



彼等は玉碎の死に燃える、
彼等は敵の屠殺に突入した。
一心同軀の血汐、
彼等の萬歳を染めた。
絶海の夜沈々、
彼等義烈の靈星孤島を蔽つた。
我等は彼等の美名を萬代に傳へるであらう、
我等は敵醜を絶海の空に刻し、
永劫に米英の殘虐を叫ぶであらう。
ああ、殉國犠牲の二千數百、
彼等の死の夜襲こそ、
我等に憤怒の靈火を高める。
我等が米英撃滅の決、

天地も如何ぞそれを奪はんや。

註 昭和十八年五月三十日、フッツ島守備隊山崎部隊長以下二千有餘の殉國勇士、無念にも玉碎せりと大本營より發表さる。本詩は同盟通信社の依頼を受けて筆者自ら英譯し、南方諸國印度その他歐米にも、電送された。英譯は左の通りである。

TWO THOUSAND IN THE VALLEY OF DEATH

The last order was bidden,
In the valley of death they charged,
Ah, the martial spirits, the brave two thousand.
Has ever war-book told the valour as such ?
What a raid at dead of night it was!



Not one of the heroes felt fear
For struggle was the sole possession of theirs.
The faithful spirits sacrificed to the fatherland,
They knew only the march of death.
To their right, to their left,
In their front, at their back,
Raged a mad storm of shells,
Thundered the cannons in fire,
Raised a Hell the darkness of the northern sea.
The devils' lightning split the night,
The roar of the Satans towered above the roar of the sea.
Ah, the brave, the brave two thousand,
The glittering souls of burning fire,
The blood-red burning heroes,
They burned in death to be crushed as crushed gems,





They charged in the enemy's slaughter-den.
 Alas, their bloodshed in belief of "one flesh and one mind"
 Crimsoned their final Banzai-cry.
 The night of the northern sea is still,
 The spirit-stars, faithful and brave, fall to the lonely isles
 of the sea.
 Let us record for all ages the heroes' glorious names,
 But carving in the skies the enemy's inglorious shame,
 We will declare the Anglo-American infamy for ever and aye.
 Ah, the martyr patriots, the loyal two thousand,
 Their night assault in the valley of death
 Inspires us with heavenly anger-flame.
 Oh, our resolve to crush and conquer the enemy of the west,
 Powerless would be heaven and earth to bid us to break it.



彼は雷雨に裂けたのでない、
 彼は憤怒に自分を二つに断つた……
 ああ、巨木轟然として倒れた。
 萬籟聲を失ひ、
 山川は歩みを止めて、
 彼の偉勳を心に念ずるであらう。

故山本元帥挽歌 一

一



一人に死んで十億に生きた英雄、
否な、彼は百億東亞に生きた。
彼は幻を作つて雲外に聳え、
日月の使命を我等に照らすであらう、
星散の陣を張つて、敵を挑むであらう。
偉なるかな、元帥山本五十六、
彼は智と力の大河、
滾々として流れて止まなかつた、
彼は大望と遠志の山嶽、
居然として風雪の暴を冷笑した。
我等自分を第二第三の山本に擬して、
時局の怒雲重々を突かねばならない。
我等涙に乏しきにあらずだ、



ただ凱歌を唱へるに急ぐのみ。

二

眞直ぐな一本榎、
壯美な存在、
彼は何の虚飾に媚びなかつた。
計畫なしに崇高に達し、
森巖に攀ち上つた、
純一、至誠。
彼は英雄だ。
彼は故國を守つて、
我等の決意を無碍に上らせる。
何處に彼に比すべき丹心の潔があらう、



星も彼に神性を誇ることが出来ない。
數千年の傳統、
必勝の生きた結晶、
海魂に徹した智の魔法師、
我等は彼に構想の天來を見た。
何物も彼の力を無にすることが出来ない、
何物も彼の靈を奪ふことが出来ない。
米英よ、汝等彼に死を歌はば、
誰か知らん、
それは自分で自分の弔歌を歌つてゐるのだ。
我等の司令長官は我等と共に生きる、
彼を葬る墓穴は何處にも無い。



徒に悲憤の涙塵を散らすな。
卿等が恨を挽歌に數へる時、
雲は漫々たる危機を孕んで、
卿等に迫るを知らねばならない。
用意だ、
必勝の鞘を拂へ、
彼の靈火は天に沖して、
我等の進路を指示する、
一人の落伍もあつてはならない。
至誠の臣、元帥山本、
彼は太陽となつて退くを知らなかつた、



彼は正義の軌道に二のないことを知った。
ああ、偉大なる指揮官の手、
空中に我等を招くを見るであらう。
新生は死の齋らす所、
彼は我等に代つて身を亡ぼした、
だが彼が天に印した報國の表旗は、
不死の凱歌となつて我等を導くであらう。
彼は灼熱のスコールを西南大海に作り、
敵に終止符を附するに相違ない。



故山本元帥挽歌 二

『誰が彼を殺したか。』
聲は答へる、『米國だ。』
『何故に彼を殺したか。』
聲は再び答へる、『彼の偉大な魂が恐しいからだ、
不遜の快感を續けたいからだ、
闇夜に不義を貪りたいからだ。』
『如何に彼を葬つていいか。』



卿等が犠牲を重ねて死に生きることだ。』



聲は三度答へる、『卿等は殉國に身を洗ひ、
國祖に跪いて嚴に律し、
巨人の如く天を仰ぎ、
生死一如に靈を縮して、
健闘の一つを往く……
これぞ彼の死に答へる道だ。
彼はいふ、「我に續け。」
彼はいふ、「後を顧みずして大義に急げ。」
彼はいふ、「焦燥を靜めて生命の無限に參せよ。」
彼はいふ、「東亞一つに結んで不死の陣を張れ。」
彼はいふ、「靈火となつて天を支配せよ。」
卿等が彼を葬る道は、
卿等が報國の赤心に燃えることだ、



軍神加藤讚仰 一

ああ、爆音立てて、天遠く、
見よや飛行機、膺懲の、
神の教へし、天の舞、
天地轟く、行進の、
雷雨を叫ぶ、世紀軍。
眼にぞ見えざる、靈感の、
門を指して、勇み往く。



悪魔を懲らす、神の護符、
空に散らばる、亂れ雲、
亂れる飛ぶよ、舞ひ上り、
舞ひ降つては、また上る。
實に無軌道に、道を見て、
眠る正義を、呼び起し、
阻む進路を、蹴散らして、
不死の文字を、天に書く。
ああ、偉なる哉、
わが日の本の、飛行隊、
軍神加藤、譽あれ。

軍神加藤、猛然と、



易きを捨てて、機に生きる、
 知能を越えし、英雄兒、
 死を恐れざる、神つ業。
 ああ三千年の、丹心を、
 腹に集めて、地を離れ、
 天に羽搏き、雲を往く、
 空幾千里、手に納め、
 月太陽に、迎へられ、
 天地を吞んで、敵を突く。
 ああ澎湃と、湧き起る、
 東亞細亞の、神つ風、
 聖火を呼んで、雄叫びし、
 我を殺して、國護る。



ああ、偉なる哉、
 わが日の本の、飛行隊、
 軍神加藤、譽あれ。
 稱へよ歌へ、偉なる哉、
 軍神加藤、魂振りし、
 悪を排して、光明を、
 暗き世界に、たたき込む。
 我等は見たり、皇軍の、
 破邪顯正の、砲火陣、
 古きを破る、聖戦の、
 世を改める、犠牲心。
 ああ、燦然たりや、日の本の、



神火の柱、燃えあがる、
 マライ・ビルマの、上空に、
 紡ぐ必勝、必滅の、
 西夷を拂ふ、大歴史。
 されど、軍神加藤、今いづこ、
 鬼神の雄姿、跡もなし、
 ただ見る影の、英雄兒、
 ああ、まぼろしの、飛行機や、
 雲に轟く、凱旋の、
 叫びは空に、溢るのみ。
 ああ、偉なり壮なり、護國神、
 誰か歌はん、死の讃歌、
 たたへよ生の、凱旋歌、



靈火となつて、我に生く。
 榮譽や永劫に、響くらん、
 榮譽や永劫に、響くらん。

註 本篇は昭和十七年九月十九日日比谷公會堂に於て『航空日加藤少
 將讃仰女性大會』開催されるに當り、主催者の委囑を受けて執筆し
 たもの。大日本長唄聯盟その作曲に當る。吉住小三郎松本和風稀音
 家淨觀杵屋吉杵屋六左衛門その他聯盟の總動員、長唄の大演奏に
 よつて發表されたのである。
 越えて二十二日加藤少將の陸軍葬築地本願寺に於て施行せられ、
 國民擧つてこの不世出の神鷲、空の至寶を哀悼の切なる慟哭のうち
 に永久の眠りへ送つた。首相東條英機弔詞にいふ、『君は素より忠
 誠國に許し勇武倫を絶せり、生死を絶し榮譽を超え、一に空中の報
 効を以て、自己の天職となせり。加ふるにその操縦の技術に至つて
 は實にその蘊奥を究め、身機一如にして二ならざるの妙を得、その
 敵に臨むや敢爲比なし。指揮の用意亦周到にして常に寡を以て能く



衆を制し進取無礙、衆は推すに名將を以てせり。是を以てその感狀を授與せらるること實に七回に及び、その敵機を擊墜すること無慮百數十機に及ぶ。宜なる哉、君が抜群の戦功は長くも天聽に達し特旨を以て官二級を進めらる、武人の恩榮一門の光譽、豈に之に過ぐるものあらんや。舉國是を以て齊しく君の勳功を傳稱し君の勇猛を欽慕し仰いで軍神となす、君たるもの以て限すべきなり。英機、亦君の警咳に接すること久し、今君が靈位に咫尺して、君が猶ほ生くるが如きを念ふ。今や幽明、既に界を殊にするを知り復た共に語るべからざるを悲しむ。嗚呼痛ましい哉、在天の英靈幸に長へに邦家を護り以て叡慮を安んじ奉るあらんことを祈る。」



軍神加藤讚仰 二

君を思へば、靈氣滿つ、
正義動いて、虹を見る、
軍神加藤、猛然と
天に羽搏き、雲を突く。

天晴れなりや、英雄兒、
我が兒なれども、護國神、



註 『大雪の』とあるは大雪山のこと、『屯田』とあるは加藤少將の父は屯田兵として北海道へ移住した人であるからである。



拜む靈峯、大雪の、
聲讚仰に、音もなし。

ああ屯田の、血ぞ叫ぶ、

挺身決死、誰か知る、

軍神加藤、殉國の、

七生誓つて、忠に生く、

稱へよ歌へ、偉なる哉、

鬼神を泣かす、神つ業、

靈火となつて、死地に入る、

凱歌や永遠に、鳴り響く。



軍神加藤讚仰 三

あなたは敢然として地を離れた。ああ、天高く舞ひ上るあなたの體よ、横に廣く延びゆくあなたの翼よ。

あなたは爆發だ、あなたは滑走だ、あなたは躍動だ、あなたは靈感だ、魂の物體を御する意志の表徴、感情の雷雨を呼ぶ活劇！

あなたは大空を掌に納めた。太陽も月も星もあなたを稱へた。

ああ、あなたは何たる力の表現であつたか。あなたは炎であつた、喊聲であつた、何物もあなたの進路を阻まなかつた……かくてあなたは遂に驀地に異なつた世界へまで突入した。



私共はあなたに天意を見た、創造力の一撃を見た、私共はあなたに神祕の復活を見た。

あなたはビルマの天空より低く印度洋へ、大和魂の火柱を一直線に立てた。



シドニー特殊潜航艇の贊

本日畏くも 天皇は昨年五月シドニーを震動させた特殊潜航艇員諸士に、位二階級を進め給うた。私はこれら勇士を一人ひとり存在であると考へない、如何となれば、彼等は皆な特殊潜航艇一つに合體した神祕そのものの存在であるからである。

私は今この艦船の偉大なるを稱へ、もつて諸士の名譽を永へに傳へんとするのである……諸士、否な特殊潜航艇よ、汝は日本の表徴だ。汝は死を恐れない、否な、闇黒に突入して、希望と生命を私等に與へる。汝は死によつて、光明の遺産を我等に與へる。



實に汝は必勝必滅の行進曲、わが日本の推動力だ……我等汝を思へば、日本魂の深奥に隠れる微細な纖維まで震へざるを得ない。

古代羅馬は罪惡の存在であつたと歴史は教へる。然し今日米英は、それよりも更に惡だ、醜だ。我等は特殊潜航艇によつて、木端微塵に彼等を粉碎しなければならぬ。

ああ、特殊潜航艇よ、汝は何たる神祕的な出現だ、汝は神州の靈氣に招かれ、韻律に動く……新しい世界を築かんとする生の原則に答へる武勇の權化だ、汝が軍神人の具象でなくて何であらう。

ああ、大東亞戦争は特殊潜航艇により、その使命達成を前進させる。我等は米英の腐肉巨體を破つて、世界の改造に急がねばならない。

ああ、汝特殊潜航艇よ、汝は東亞諸民族を米英の物的束縛から解放し、東亞諸民族を彼等の奸智と富の陷穽から救ひ出す。汝は



東亞諸民族に、蘭の掩護より大空の甘く清きを教へる。

汝の勝利は我等の日本魂が不死永劫なるを立證した。見よ、暴
戻米英の巨城は一つ一つに亡びゆく……我等の魂は破邪の利劍
だ、不遜にして我等に抗せんとするもの皆な崩れざるを得ない。
我等の大和魂は顯正の方理だ、謙讓にして我等に組するもの皆な
榮える。

私は今全濠洲の心臓部シドニー、否な死地へ、我が特殊潜航艇
の乗り行くを思ふ……闇夜油の如く海波に流れて、無言の間に我
等を手招く。艦船は枚を銜んで港内深く潜入した。

一發二發、爆彈炸裂して濠洲情民の眠を破つた。膺懲の火は家
屋を焼いて、修羅の地獄を作つた。

されど我が特殊潜航艇は、骨をシドニー灣に埋めて歸ることを



肯じない。勇士は我が日本の正義と武俠を唄つて、敵濠洲を永劫
に監視し、また威嚇しなければならない……ああ、偉なる哉日本
の特殊潜航艇よ！



東亞進軍譜

妖魔を拂ふ、曉鐘の、
 亂打に覺める、大東亞、
 民十億の、進軍譜、
 天に木靈し、虹を呼ぶ。
 易きを蹴つて、難に就く、
 知能を捨てて、機に生きる、



死生一如の、十字軍、
 天地を結ぶ、血染め雲。
 ああ澎湃と、湧き起る、
 八紘爲宇の、神つ風、
 虚空を御して、雄叫びし、
 正義降らして、土護る。
 偉なり壯なり、必勝の、
 奇瑞起つて、醜を斷つ、
 隨神歸依の、天津業、
 撃ちてし止まむ、鐵火軍。



落下傘部隊 一

神風競ふ、南下して、
 はるか六千、有餘キロ、
 勅を奉じて、敵を吞む、
 颯爽たりや、神風の、
 奇瑞動いて、盡くるなし。
 今見る神符、燦々と、



敵の諸島に、降りそそぐ、
 空幾千の、百合の花、
 襖き白衣に、雄叫びし、
 地上へ下る、義の御幣。
 これ日本の、落下傘、
 神意を投げて、敵を打つ、
 地上の砲火、炸裂し、
 嵐作つて、道はばむ、
 われに奇襲の、用意あり。
 精悍無比の、急降下、
 獲物を狙ふ、鷲の群、



敵の陣地へ、自らを、
降らして生きる、放れ業、
ああ必勝の、決死隊。



落下傘部隊 二

神風競ふ何ぞそれ旺盛なる、南下水域六千キロ、國祖の勅を奉じて西南太平洋を蔽ふ。天さかり戦果を神に披き、地を走つて蜿蜒數十の島嶼、一つとして我に靡かざるなし。

ああ、神風赴く所颯爽たり、奇瑞動いて盡くる所なく、今見る必勝の神符、神風の降りそそぐ所、燦々たりスマトラ島上に集る……空中の花畑、百合數百千、襖の白衣嚴かなり、雄叫びして地上へ下る。

これ敵必滅の御幣、天津息吹、振魂して醜を打たんとするなり。



ああ、誰か知らんこれ日本の落下傘兵、天空より神意投下、以て蠻夷を屠らんとするを。
 敵の地上砲火、爆音を作つて炸裂し、血汐のスコールを逆様に降らせど、皇軍鎮魂の構へあり、精悍無比の急降下、獲物を狙ふ鷲の如く敵陣地へ自らを降らせたり……ああ、これ乾坤一擲の放れ業、決死必勝の使命、ああ、天業翼賛の凱歌だ、隨神歸依の實踐だ。

註 昭和十七年皇軍始めてスマトラのバレンバンを攻略するに當つて、始めて落下傘を使用した。



天かける靈鳥

十二月八日ただ一日に世界は一變せり

ああ、天かける靈鳥、
 一翼布哇を撃ち、
 他翼マライを斃す、
 大鵬か、否ないな、日本魂、
 羽下に世界三分の二を納め、
 洋上千餘の島嶼、杯を開いて、
 皇徳の美酒を受けんとす、



畏きかな、妖雲影を失ひ、
天日燦然たらんとす、
我等肇國の神勅に聞く、
『大人の制を立つる、義必ず時に隨ふ、
苟も民に利あらば、何ぞ聖造に妨はむ』と、
この言ありてより二千六百年、
何ぞ眞理の行はるそれ遅きや、
他を奪はず自ら分を守る、これ道なり、
天皇、暴戻搾取の國家に退けと命じ給ふ、
肯じざるに於て、劍の審判に服せよと命じ給ふ、
これ八紘爲宇の遺訓に則り、
地に平和の慈雨あらしめ給ふ御慮なり、
われに神護あり、正しきを賞みし給ふ、



われに決意あり、顯正の死を迎ふ、
腰間の秋水、叫んで止まず、
『民族維新の黎明だ、
起て、往け、
使命に殉ぜよ！』





砲 撃

砲兵は雑草を分けて這ひあがる大蛇だ、
敵の虚について忍び寄る、
誰が彼に縦横の奇智あるを知らう、
誰が彼に破壊の靈氣漲るを知らう、
彼は敵の見えざる神祕の間に砲車を据える、
彼は運命の鍵を掌中に握る、
弾丸をかつ飛ばして必勝の陣を張る……



弾丸命を奉じて撃滅亂舞を承る、
ああ、これ一死盡忠の日本魂だ。
唸る、唸る、魔だ靈だ、
一發一發雷を呼ぶ、火を呼ぶ、血を呼ぶ、
見よ、大地を走る破邪の弾丸！
まつろはざるものを征服し、
拒む者、遮る者、力あらば拒んでみよ、遮つて見よ、
弾丸は敵を木端微塵に打擲する、
妥協も我慢も彼は知らない、
炸裂一死、大義を守り貫く、
我彼に碑を作る、曰く、
『彼こそ死してなほ生に徹するもの、』



疾呼一番、懦夫を起たしむ。』

註 現地寫眞『マライ戦線に活躍する我が精銳』に題せるもの。



潜艦一撃

神話を目のあたりに見る

日本武尊熊襲を蝦夷に平げ給ふ、御年十六の身にてこの大事を遂げ給ひしこと人間業にあらず、神意乗りうつることなしに焉ぞこの事あらんや。武尊の武勇は遠く昔の物語なれど、我等今等しき奇蹟を見る。太平洋上眇たる一潜艦、敵の航空母艦を雷撃奇襲して三萬三千トンの巨艦を屠れり、これ武尊が劍の一撃よく熊襲を刺し給ひしと同じからずや。ああ、神話を目のあたりに見て、我等は神ながらの偉力盡きずして日本に脈打つを知る。嘗て日露



の戦役世界を驚かせし時、英米眼を見張つて『デビッド、遂にゴライアを斃せり』と讚歎しき。これ彼等が日本武尊を知らず、わが神風の吹く所敵なきを思はざりしが故なり。誰か期せんや、英米今日自らゴライアとなつて日本に跪かざる可からざるを。

ああ潜艦の、神業や、
波に浮いては、また隠れ、
神意奉じつ、行に生く、
神出鬼没、必勝の、
捕捉し難き、機を狙ふ、
蠻夷齒向ふ、敵見るや、
魚雷電撃、打ちのめし、
波に潜つて、爆裂の、



戦果に耳を、敬てる。

註 昭和十七年一月中旬日本一潜艦南太平洋上に於て、レキシントン型航空母艦に奇襲命中弾を與へた。潜艦の勇士等水中にて二大爆音を聞き、以て敵艦の沈没せるを知つた。



ラングーン爆撃

シュウエ・ダコン三百七十呎の黄金塔、
森の彼方に脊のびし、美風景を眺める、
これ佛國ビルマの都ラングーンのローヤル湖……
湖水は静かだ、妙音の漣を散らし、
群青の空が降らせる涅槃の道に答へる。
周囲の樹木は法身の喜びに浴し、
赤き心を熱帯の夢に包む。



湖畔に見る青年僧侶三々五々、手に鐵鉢を持ち、身に黄
色木綿を纏ひ、
黙々として遍照一路の旅を辿る、
誰か飛行機の爆音彼等の静寂を破るを知らんや。
濃霧いやが上に盛りあがり来る、
化佛の浄土消えて跡なし、
ああ、靈光の黄金塔今いづくに影を没したるや。
恐るる勿れ、閻浮の悪鬼迫るにあらず、
日東の健兒天かける數千哩、光を迫つて來れるなり、
解放を運命の門に叫ばんがため來れるなり、
荒野に叡智の種を蒔かんがため來れるなり。
爆彈落下、命中一丸、二丸三丸、五丸、



濃霧恐れて左右に開く……
ああ、降りそそぐ光明三千丈、
洗はれたり一天、群青に波なし、
空の僧侶數百千、鳶鳥算を亂して日本の飛行機を迎へる。
見よ黄金三百七十呎、認識の微笑を洩らし、
湖畔法城の佛護舊の如きを眺めて喜ぶ。

註 黄金塔シウエ・ダコンはラングーンの誇り、その素晴らしき言
語に絶し、世界いづこに匹敵するものあるを知らない。佛敎國ビル
マは國法により男子十三歳以上のもの一定の年月を限り、みな僧侶
生活に入ることになつてゐる、故に、黄色木綿の青年僧侶ラングー
ンに溢れる。



血を捧げるハイビスカス

白い雲と紫の海、中間を結ぶ青の連山、
自然は解體して色彩に崩れる、
何といふ逸樂の幻影だ。
驟雨横ざまに地面を叩きつける、制限を知らない、
世界は意識を失ひまるで狂氣だ、暴力を稱へる、運命ま
かせだ。
廣い大路の並木は夢遊病者のやうに頭を振る、



手を振る、呪文を唱へる、半時間後の光景を待ち設ける
……
この時天は緑一つに塗りつぶされ、五色の虹が鳥々を抱
くであらう、
何といふ潤澤な變化だ、
何といふ力の充實だ。
だが人は何故にハイビスカスが眞赤だかを知らぬであら
う、
私は知つてゐる、全身が血なんだ、
深夜眞赤な血をぼたりぼたりと滴して、
亡國の悲痛を傾く月に訴へる。

暴戻自ら高ぶり、自由を穿き違へて他を奪ふ者、



米國人は島民の謙虚、低きを守るを利とし、
優越以て彼等に迫り、島を自分のものにして仕舞つた。
米國人は港を掘り、要塞を築いて艦船を並べた、
空に飛行機を群らせて、太平洋の廣きを睥睨した、
彼等はハイビスカスをホテルの廣間に撒散らし、踏んで
舞踊し、

それに悲痛の血潮でなく、歡樂の飾りだけを見た、
ああ彼等は虚榮の市に、空論と誇示を弄ぶ賭博者だ、
この傲慢無禮、如何て天の膺懲なきを得んやだ。
十二月八日、天皇對米英宣戰布告なし給ふ、
殉國の海鷲、燃える羽翼を擴げて數千海里を飛んだ、
爆彈投下、空中縦横の活動、
眞珠灣上曉を破り、一舉に米國を屠つた、



結婚の菓子戦艦首をそろへて藻屑となつた。
 だが誰か眞赤なハイビスカス忽に青く變色したのを知つ
 たらうか、
 私は知つてゐる、花は全身の血潮を日本の飛行戦士に捧
 げたからだ、
 ああ憂國の花、ハイビスカスよ、私はお前の深夜の祈禱
 を聞いて、
 健氣な心中を察したい……勇み立ちどよめく墓は、ああ
 誰の墓か。

註 ハイビスカスは一名琉球木槿といふ葵科植物。芍薬に似て單咲も
 あれば八重咲又狂咲もある。花も葉も眞赤で區別し難い。



マライ夜營

誰がゆり蚊帳の夜營を想像したらうか、
 ただの蚊帳でない、大きな螢籠だ……
 豆ランプのやうな澤山の光が包圍する。
 遠く怪しげな動物の吼え聲が聞える、
 『大蛭に注意しろよ、食はれちや大變だぞ』の傳令が飛
 ぶ。
 近くの叢で蛇か何かが這ひ廻る音がする。



蚊帳の隅で戦友が懐中電燈で手紙を書いてゐる、

『ああ、こんな遠い所へやつて来て戦争するとは思はなかつたな、

手紙がいつ女房の手に入るか知れたものでない、もう止めだ。』

一人外の戦友は寝苦しい熱氣に目をさましていふ、

『國は今頃寒いだらうな、熱海でやつと梅が綻びかける時分だから……』

またぞろ國の化物の御入來だ、僕の弱氣を許して呉れ、

ははは！

どうにかぐつすり寝たいものだ、明日の進軍が控へてゐる。』

上陸以來の經驗が心の眼に映る……



限りなく続く椰子や護謨や芭蕉の林、

その間から人をびつくりさせる眞赤な大きい太陽、心づくしの煙草や三つ四つのマンゴウを載せて、

前の自動車に白布の英靈五つ六つが揺られて行く。

他の螢籠から『シンガポールはもう何キロかな』の聲が聞える。

明日また英靈の數がふえやしないかな！



マニラ陥落

陰謀の牙城潰る、マニラ落つ、
長き脅威の日終れり、
鐘を打ち、永へに侮辱と壓迫を葬らしめよ。
八十年の隠忍自重、我等誇るにあらず、
蹶起一番、彼等の野望を断ち、
敵性行爲遂に封じられたり……
見よ、三番目の血祭り、マニラ落つ！



我等高らかに天業を稱へざる可からず。
國舉る總進軍、南へ南へと開始されたり、
今や天下の公道より傲慢無禮を驅逐する時來れり。
マニラ劫火の棺に横たはる、
誰か來りて挽歌を唄はん、
何處の閑人埋葬の聖歌を口吟まんとするや。
汝死せるマニラ、阿諛と恫喝に弄ばれたり……
米國の玩具！
汝憐れむべき生贄、
富と策謀に身を亡ぼせり、
何處に涙ありてこの誤れるものを悲しみ弔はんや。
されど生けるマニラあり、



ヒカリッピン亡びず！
我等の眼前に實在し、
我等の手を握らんとす、
ああ、解放を叫ぶ彼等の聲あり、
獨立を夢見て隣人の力を乞ふ。
彼等は歴史の光榮にかへり古き智勇に甦る。
我等は彼等の熱涙面に滂沱として滴るを見る、
彼等感激を堪へ、暁の太陽を拜せんとするを見る。

註 本詩はJ.O.A.Kの委囑により書けるもの、昭和十七年一月四日夜
マニラ陥落報道終つて、丸山定夫氏朗讀、全國に放送せられた。



シンガポール陥落 一

後退した、
天運の盡き、合法の結果、
年貢納めて手をあげた。
狡智で奪つたもの、今實力で奪ひかへさる、
彼は自然の大義に平伏した。
日本は彼の大動脈を切つた、
鮮血淋漓、心臓に止めをさした。



専制自負の一百年、
天に逆ふ一場の夢、
日本は遂に終止符を打つた。

島を圍む兵隊の護謨林、
鳶と群がる飛行機の銀翼、
吼える大砲は天下を呑んだ。
人は要塞に凡て科學の集團を見た、
人は封度億兆の塊りを見た。
人は難攻不落の呪文を聞いた。
ああ、誰か日本の天譴この誇示を粉碎し、
一朝にして主なき空屋たらしむるを期せんや。
今攪亂搾取の巨魁去つて跡なし……



皆共、大掃除だ、窓を開け放つて、
群青の空を清き部屋に臨ましめよ。

ああ、淺ましき偽善者よ、
汝は權威と富に諂つた、
汝は優越を僭し弱者を傷けた、
汝は自ら欺き、放縱神を瀆し、
徒に怪辯妖語を撒散らした。
ああ、汝は天の笞の下るを知らなかつた。
日本は汝の魔手を封じた、
東亞永遠の門を左右に開いた。
我等共存共榮の美に則り、
顯正破邪の劍を磨き、



天道守護の楔たるを誓ふ。

註 昭和十七年一月十五日午後七時四十分大本營よりシンガポール無條件降伏發表さる。國擧つて歡呼あがり英崩壞の第一歩なりとする。翌十六日帝都諸新聞陥落の報滿載。本詩は讀賣新聞紙の載する所なり。



シンガポール陥落 二

ああ、何たる作戦の完遂よ、
 五十有餘日勝利の連鎖、
 誰の戦史がかかる大攻略を知つたであらう。
 悪戦苦闘の文字、皇軍の知らざる所、
 彼等は極熱下の瘴癘を征服した、
 彼等は猛獸のジャングルを足で蹴つた、
 彼等は鰐跳梁の大河を渡つた……



空陸一體、装甲機械の全智能、
包圍攻撃、迂回行進、
追撃疾走、肉迫突破、
有らゆる戦闘の總決算！
凄絶、鬼神も泣く道を知らなかつた、
ベナン、イボ、クアラ・ルムブール、マラッカ風潰し、
神速南下、一氣に一千餘キロを屠り、
最後の據點シンガポールに登る朝日を拜した。
皇軍の歡聲怒濤の如く颶風の如く高まつた、
萬歳の聲、ああ、天地を歴した。
シンガポール要塞四平方哩を蔽ふ、
セメント百萬噸の大集積、



汝亞細亞の億兆資財を虚榮と威嚇に亂用せり、
汝狡智を總動員して西太平洋に嘯いたり。
平和と正義を無視するもの、我等の亞細亞を奴隸視する
もの、
今日日本の天誅、よく汝偽善者の假面を剝ぐ、
我等共存共榮の時、今日を期して始まる。
汝英米の掠奪者、不倫の凡てを捨て、
百年の罪科を謝して身を清めるの時だ。
ああ、今亞細亞は存在の威嚴を確立し、
悠久にして盡きざる人生始めて開かる。
見よ、南洋の大空燦然として煌く、
我等今平和の陣を張り、繁榮を築くの時來れるを知る。
我等足を群青の海水に洗ひ、



頭をあげて奉祝の鳶圓を描くを見る。
椰子の木高く空中に延び、自由と解放の喜びに揺れるを
見る、

護謨の木並んで隊伍整然、平和の列を編むを見る。

ああ壯なる哉皇軍の偉力よ、よく歴史を一變して新紀元
を開けり、

我等萬歳を三唱して、皇軍に感謝を捧げる、

萬歳、萬歳！

註 本篇は昭和十七年二月十六日放送局より、全国に放送せる陥落祝賀
の詩なり。



偉業百日に成る

一

西南太平洋の圓天井、

緑の天空、

飛行機飛ぶ、飛ぶ飛ぶ、いな飛行機でない、

鳶だ鳶だ、鳶だ……鳶でない、

夢を求める世紀の靈だ、

いな、きつと勝つの日本魂だ。



誰が大空を馳せ廻る日本人を想像したか、
誰がこの壯觀を豫期したか。

二

一舉南下六千キロ、茫漠たる空間はるかに光るもの、何か。

日の丸の旗だ、日の丸だ日の丸だ、
洋上島々に懸へる日の丸の花畑だ、

旺盛なりこの光景、誰がかかる戦果を豫期したか、
誰がこの偉業百日になるを想像したか。

更に見よ、日章旗煌く所、ラングーン、ジャワ……
ああ、米英の包圍陣營今いづくにかある。

日の丸燦として死せる牙城に羽ばたく、



これ畫龍點睛、

金剛不壞の譽、

構想全きを祝ふ聲、萬歳天に上つて怒濤の如し。

未來の歴史家よ、卿等何の言葉あつて米英野望の末路を

語らんとするか。

卿等は如何に皇軍の挺身不敗を稱へんとするか。

奇蹟だ、神業だ、

何たる魔法の現實化よ。

香港、シンガポール、ダーウオン、消えて跡なき三角陣、

また米國の三つを繋ぎし海覇の寸斷、

誰が悲んでその挽歌を奏てんや。

日本晴れの朝嵐、

西太平洋を蔽ひ盡して、



ああ、何ぞ爽快なるや。

三

友よ、南民族の人々よ、
起きよ跳ね起きよ、暗き寢室より目覺めよ、
卿等は今自己の歴史を書き始めねばならない。
卿等の榮えを踏み躪り、
私慾に餓えし吸血鬼、
今や卿等の世界を遠く離れたり。
とく起きよ、我等と共に、
放たれたる身の自由を神に萬謝せよ。
曉の喇叭朗々と響くにあらずや、
聞け、聞け。



明治神宮参拜

年頭に際し明治神宮に参拜す、
大道常磐木の森を貫く、鳥居をくぐり、
社前に額づく、
われ皇軍の凱歌と犠牲を懷うて肅然たり。
ああ、戦果の取り入れ榮える時、
犠牲の涙を數ふるは、果して非か、
國運隆盛の祭典は、



悲みの山に開かざる可からざるか。
神聲あり、われに挽歌の誦唱を禁じ給ふ、
涙を後に、勝鬨を前にせよと命じ給ふ、
一の犠牲百の戦果を生めるを祝へと命じ給ふ。
神前に頭を垂れ、
われ幻の戦士勇んで光榮の山を登るを見る。
彼等神の杯を受け、許されて次席に就けるを見る。
耳に雷鳴の轟くを聞き、目に雷光の煌くを見て、
ああ、世界の改造新しき歴史の述作ここに始まるを知る。
われ祈禱と恐怖に慄く、神託の身に迫るを覺える、
汝犠牲より後退する者、膺懲の鞭を受けて劫火に入れ！
汝保全に急なる者、神護を離れて野獸を友とせよ！
祖神まのあたり降臨し給ふ時、



卿等は恥なくして仰ぎ見るを得んや、
ああ卿等、祖神の手づから殉國の酒杯を受くる權利あり
や。

註 本詩は前掲『彈丸』と共に、昭和十七年二月六日筆者自ら朗讀放
送せるもの。



軍神

軍神嚴然として顯れ給ふ、
 曉の鷄數百、金翼を連ねて軍神を取捲き、
 太陽に映じて光景いと壯麗なり。
 鷄は軍神の使者、昨日の戦果を唄つて、
 その偉力を語る、聲天に冲せり。
 軍神耳をたて遙に喇叭を聞き給ふ、
 ああ勇ましき哉、喇叭の音や！



『汝マニラの夜を破つて敵心を寒からしめたり。
 マライの山野暗く、野獸の臥床を作れど、
 汝の一聲光明を運び、象虎獅子みな心一つ、
 皇軍の神機に觸れて従順なり。』
 喇叭終る、軍神更に耳をそばだて給ふ、
 鐵の登音大地を震はすを聞き給ふ、
 西太平洋の暴動一つ一つ靜まるを見給ふ……
 これ伊勢の神風、奇瑞を示現せるなりと喜び給ひ、
 鷄の金翼を命じて天空彼方に飛び給ふ、
 この時軍神遙けき地上を眺め叫び給ふ、宣ふ御言葉に、
 『ああ美なり世界の本津國、日本よ、
 山嶽連なりて綠の堡壘を築き、
 山河悠遠に流れて盡くるなし、



邪なる策動終る所、
 神意動いて風なごやかに、
 ああわが祖國よ。』

註 本詩は日本武尊を想像して書いたもの。尊東北の蠻族を征服せられて歸路、三重の能煩野といふ所で御逝去になつた。尊の魂は八尋もある翼の白鳥即ち八尋白知鳥やちよことなつて、太空高く飛び廣い大海を越え給ひしとある。



砲煙彈雨の贊

ああ、聞け、膺懲の夜樂、
 大地に轟く聖戰の曲、
 砲車は突撃を奏して、
 目に見えない凱旋の門へ進む。
 これぞ日本の雷雨を呼ぶ世紀の聲、
 悪魔を蹴散らす意志の表徴！
 ああ、何たる砲聲の急調よ、



ああ、何たる憤怒の爆發よ。
見よ、火焰の雲、
天を蔽ひ、
地廣く横に延びる……
擴がり擴がつて天地を呑む、
一網打盡、正義の炎だ、
創造の噴出だ、
力の氾濫だ。
ああ、皇軍は夜陰を焼き盡し、
地を離れる前進の聖火だ、
暗き世界への光明だ、
眠れる神祕の復活だ、
何物ぞ彼等の企圖を非難せんや。



彼等は誤れる人生を破壊し、
是正の文字を墓標に刻む。
ああ、我等を再び天地創前の渾沌に歸らしめ、
希望の實在を闇黒に見せしめよ。
耳あるものは聞け、眼あるものは見よ、
砲火は宇宙再建を唸つて止まない、
『我等の任務は汚れを清める、
誰か眞實の人生死灰より上るを知らざらんや。』



飛行機

誰か飛行機に感情の圧力を見ないであらう。
誰か飛行機に本能の渦を感じないであらう。
誰か飛行機に信念の静寂を思はないであらう。
私は飛行機に決意の峻節を見た。
私は飛行機に神祕を見た。
私は飛行機の正しい排列の飛翔を見た、



無摩擦と無抵抗の安定を見た、
ああ、何といふ見事な見物だ。
そして私は見た、
飛行機のぐつと突込む姿、富士山よりも高い空から突込
む姿を見た、
飛行機のぐんぐんと突上る姿、星や月の彼方まで突上る
姿を見た、
爆音の破裂、猛威の進軍、
犠牲と勝利の亂舞する姿……
ああ、何といふ恐しい見物だ。
私はまた見た、
飛行機のばらばらと散るのを見た、
銀杏の落葉だ、



『屠れ米英われ等の敵だ』で町は溢れる、
私もこれを叫ぶ、聲を嗚らして叫ぶ、泣きの涙で叫ぶ。
私の若い時代の十二年間を養つて呉れた國だもの。
忘恩行爲だつて、國家の運命に替へられない、
過去の繋りは一場の夢だ。
昔の米英は私に正義の國だつた、
ホキットマンの國だつた、

屠れ米英われ等の敵だ



否な、櫻の花弁だ、
散華だ。
私は黙禱して心に思ふ、
『戦果は犠牲により、
死を重ねて築きゆく殿堂……
今日も仕事は立派に前進した。』



ブラウニングの國だつた、
然るに今は富の陥穽に落ちた放蕩者の國、
見てはならない夢を漁る不倫の國……
この不埒を天誅する、眞實の米英を屠るのでないとする
ものもある。
私が米英時代に作つた友人は多い、
最早や故人になつて、私の屠れを聞かずにすんだものも
ある。
この幸福は、どんなに私の幸福であるか知れない。
今なほ存命中の友人は私にいふであらう、
國と國との戦争だ、僕等の友情は破れるには神聖すぎる
……
馬鹿な、そんな念佛は一億一心が承知しない、徹底的だ、



徹底的だ、
友情もろ共、君達もずばりと屠つて見せる！



無敵軍

- 一、ああ湧きあがる、感情の、
嵐だ熱だ、挺身だ、
我等自慢の、體當り、
暴戾國家、かかり來よ。
- 二、見よや火を噴く、熔岩の、
流は落ちて、山と成る、



- 日本男子の、血の潮、
凝つては作る、金字塔。
- 三、今ぞ世紀の、大歴史、
高まる波の、絶頂に、
神を認めて、我等往く、
ああ殉國の、犠牲心。
 - 四、知るや無敵の、日本軍、
逆ふものは、粉微塵、
叫ぶ正義や、天を突く、
大地ゆすぶる、大勝利。



神護國

- 一、雲破れたり意氣高く、
闇拭はれて天清し、
興亞陣營嚴然と、
部署をかためて劍を抜く。
- 二、我等身を捨て靈を取る、
死線を越えて義に生きる、



- 世を恐れざる大決意、
天地動かす力なし。
- 三、ああ雲を作つて巻上る、
太平洋の神つ風、
われを助ける奇瑞あり、
暴戾國家波に消ゆ、
謝せよ稱へよ天祐の、
厚き恵みの神護國。



終りなき聖業

世界は沸くが如き靈感の雲を見た、
巖然山の如き意志、さては雷雨の吶喊……
天皇戦を宣し給うて僅か一年の歲月！
空中火花を撒く飛行機、
濛濛南下、太平洋を蹴る雄姿、
罪の所有を後に走る敵性國家……
我等千年の戦果を僅か十二ヶ月に見た。



ああ、誰か豫期せんやこの奇蹟を、
否な奇蹟にあらず、大義の突撃、
人間維新、世界改造の叫だ。
されど我等が聖業、歲月の如く終るを知らない、
今武勇を新たにし、光榮の二期に入らんとする時、
我等闇夜に劍を磨ぎ、翌朝轟然たる進軍喇叭を待たねば
ならない。



熱情が理智に、
 本能が良心に一つになる。
 我等は摩擦の何たるを知らず、
 一億一心、起つて叫ぶ時、
 爆裂の嵐を作り、
 坐して静まる時、
 肅たる祈禱を捧げる。
 我等は峻厳にして柔順、
 勇敢にしてしかも謙讓なり。
 我等鳶の如く空を往く時、
 流線形の整體に則り、
 我等地に跪く時、
 耳を聳てて君恩の普きを知る。



我が日本國

我が日本は感情の噴出る泉、
 智能流れて盡きるを知らず、
 誰か永劫を我が瞬間に見ざらんや。
 樹木は衝動に生長し、
 山は思慕の花を飾る。
 民は平凡な生活に神祕を見て、
 整合融和の大法を感じ、



今聖戰第二年の元旦に際し、
遠く國祖の神託を奉じて、
亞細亞の修理構成さらに急なるを思ふ。
決意巍然として富嶽の如く硬く、
勇往邁進、
燦爛たる意氣、
岸洗ふ太平洋の怒濤の如く、
また空に逆捲く雲の如く、
動いて止まるを知らない。
我に必勝必滅の言葉あり、
焉ぞ西夷の我に抗するを得んや。
萬歳を三唱して、
洋々たる希望を仰ぐ。



箒 星

地を離れる構想、
高く舞ひ上る夢の力……
去年の今日、畏くも下し給うた詔勅を奉じ、
我等一齊に敢戦の行に上つた。
ああ、我等の歌は靈の突破であつた。
意志の怒號であつた、
風雨を叫ぶ檄致であつた。

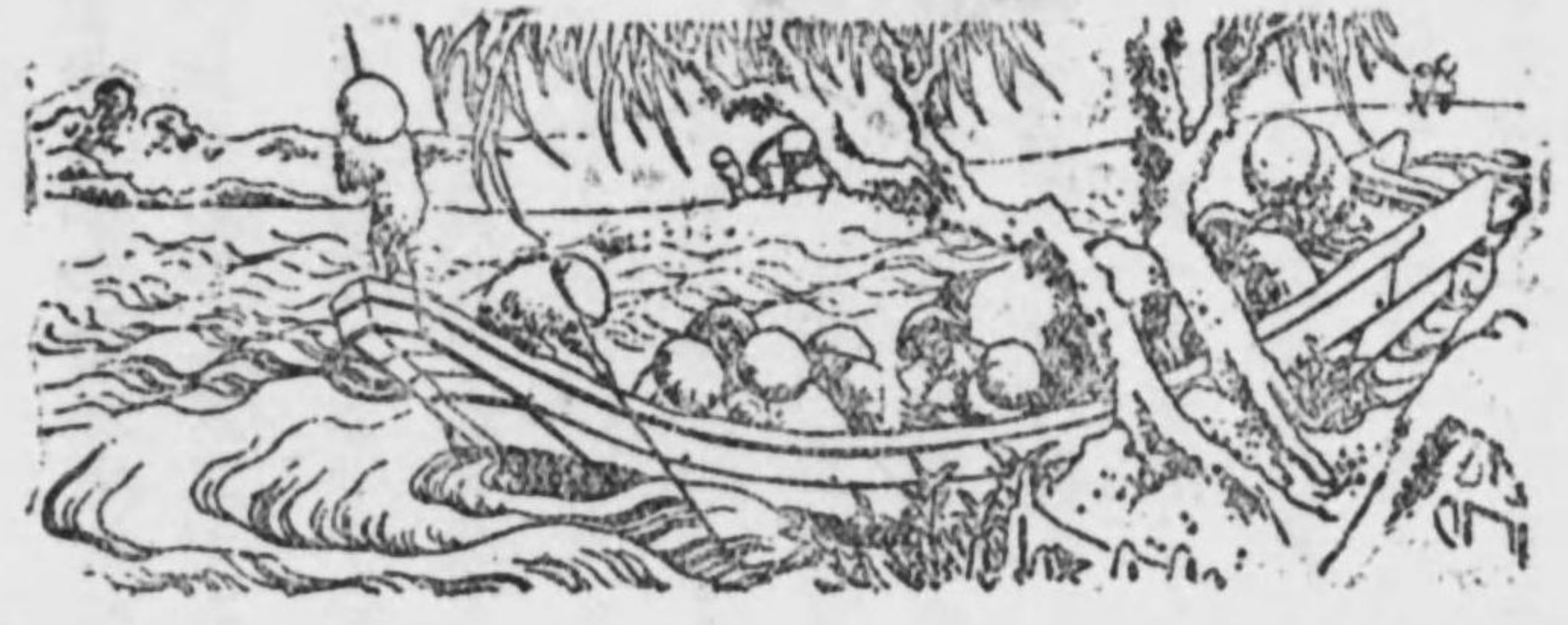


我等三千年も握つて來た掌を廣げ、
南太平洋諸島を納めた、
然しそれは暴戾の掌でない、
愛撫の掌たるを期した。
我等詔勅の言に答へて、
熱帯の水と太陽につかつた、
新しい人生創造に挺身した。
今聖戰第二年を迎へるに當つて、
我等は人生が力であり、火であるを再認し、
天意が我等を導き給ふことを知つた。
我等は靈活となつて突進し、
義の一撃によつて、
神祕の復生が我等の任たるを知つた。



我等は魂の彗星となつて、
亞細亞の空に烽火であらねばならない。

第二部





神嘗祭

神よ、我等今新穀を御前に供へる。
國祖大神、民に耕を傳へ給うたと承る。
爾來四千年の長日月、
我等土壤の愛を離れたことなく、
鎌と鎌の間に、
人生の和平と歡喜を求めた。
我等それより生活に光を點じ、



永遠の至奥、
自然の聖門に横たはるを得た。
ああ、自然の生々多産よ、
動いて止まらず働いて憇はざる自然よ。
我等自然に従つて疑惑憤怒、
一切の諸惡を捨て、
國土の隆興に參じ天意を満たさんとす。
太古の昔、神々國作りし給ひし時、
諸物その聲に應じて顯はれたりと聞くが、
我等農民種一粒を百粒の米に化し、
神よ、今この新穀を御前に供へて、
我等が神の子孫たるを立證し、
美國土を永劫の家とし給ひし恩寵を謝し奉る。



されば外夷邪に我を襲はば、彼等に膺懲の一撃を食はし、
若しそれ我等師を遠く送らば、
懈怠を捨離して勞に精勤し、
曉に霜を踏んで鋤を土壤に入れ、
夜三更に及ぶも思を田野に馳せ、
只管銃後を盤石の安きに置かんとするなり。
神よ、我等が新穀の供物を受け給へ、
これ綠蒼々たる天空の下、
雨露の恵が凝つた靈の精華、
無限力を一粒のなかに壓縮したもの、
森嚴にして一徹なる祖國愛の擬象、
即ち、
我等が魂の表徴なるを認め給へ。



瑞祥降下

ああ、何といふ豊饒な秋だ、
(眞晝時汽車は沼津を離れ、鈴川を通らんとしてゐる、)
私は横に流れる雲の間から、富士の眞珠色新雪の目映い
胸部を拜した……
女神は顔を隠し、新穀の薫りを窓越しに嗅ぎ給ふ、
女神は足元に擴がる坦々幾千里、實る撓わな稻を嘉し給
ふ……



古金壯美な色一つに塗りつぶした敷物だ、
否な、悠久三千年瑞祥の開示だ。
皇孫瓊々杵尊降り給うた時、
八咫鏡に映つた光景は、この瑞祥であつたであらう、
初帝樞原宮を築き給うた時、
畝火山麓にどよめいた萬歳の瑞祥は、この光景であつた
であらう。
我等今三度この瑞祥を見て、國土永へに榮えるを知る。
ああ、曠古の戦下、
一周年を迎へるに當つて、
必勝必滅の鐵意、眼前の光景に喝として聲あるを知る。
ああ、何といふ豐饒な秋だ、
撓わに實つた稻の一粒一粒に、



我等が強靱な日本魂を見る。
天無意味にかかる豊稔を降し給ふ理あらんや、
我等この無言の表徴に答へ奉り、
戦力無限に盡きざるを誓ふであらう。



天下の秋

どんな形にも區切つたのでない、
自然の景致は無限に擴がり溢れる。
額縁に納められない大幅だ……
若しこれが高肉彫であるならば、
實つた稻の黄金盤に、
村の神社や人家の森を盛上らせ、
心行くばかりの機微を吐露した大藝術だ。



永徳も光琳もこの光景を見なかつたであらう、
だが、見たいものがあれば、彼は龍安寺の石庭を作つた
棗駝師であらうが、
彼も古金燻し稻田の波と青い樹木の對照を知らなかつた
であらう。
龍安寺の岩は渡溪の虎が水を噛む形だと聞いてゐる、
然し私は眼前の景に、松島三々五々の散在を見るのであ
る……
本當に豊饒な稻田は黄金の海だ、
私は今自然の法悦を満喫した。
だがあたりを顧みて人なきを知つた時、
自分が餘りに閑寂な姿であるに驚いた。
時しも夕日は、光さんと雨を稻田の海に降らした、



そして稲穂、否な神代ながらの金波は漣立つて動くのを見た。

村の神社や人家の森は風にそよぎ、

迫つて来る薄暮の間に

私は十六羅漢が渡水の擬状を作るのを見た。

註 京都笠山麓にある龍安寺の名石庭は、虎の兒渡と稱され、砂上に石を點々配置した手法に成つた極めて象徴的なものである。築造年代は室町後期とされてゐるが、その作者の誰であるか不明である。



大東亞佛教青年大會の歌

一

悪魔熱砂を、捲き起し、
雷雨の火花、推し寄する、
或は妖姿に、肩を振り、
輕羅の波に、拍子取る、
されど釋尊、敢然と、
醜を拂ひし、菩提樹^{じゆつじゆ}下、



正覺寶座、永劫にあり。

二

鬼畜の歴史、歸り來る、
醜の米英、策を積み、
東亞を荒す、妖雲の、
撃滅叫ぶ、正覺や、
誓は固し、護法陣、
法國一如、斷の文字、
我に正義の、譽あり。

三

ああ民有りて、法生きる、



榮える國家、道固し、
張れよ佛徒の、慈悲の陣、
力一つに、醜を打て、
うたへ護法の、海潮譜、
うたへ護國の、大讃歌、
最後の勝利、我を呼ぶ。

註 昭和十八年七月大東亞佛教青年大會東京に於て開催さる。本歌は
橋本國彦氏の作曲により、東京音楽學生男女學生五十名が合唱せる
もの。



興福寺龍燈鬼

寄木造玉眼倭入胡粉塗りの鬼よ、お前が頭頂に載せてゆく六角の燈籠は、恐しく重いが、お前はそれを落すものでない。私は燈籠に不滅の火が燃えて、世界の闇黒を劈くであらうを知つてゐる。燈火は神の認め給ふ眞理に外ならない、萬代不易の表徴だ。今わが日本は、聖戦に暴戻不遜な外敵を蹴散らし、彼等に正義を教へんとしてゐる。この燈火こそ我等の心でなくて何であらう。鬼よ、ああ誰が鬼の名前をお前に附したか。お前の顔は確に醜だ。お前の手足は、岩の如くに凸凹して、婦女子を擧め面させる



ことは請合ひだ。然し私共は、お前が首に絡まる青龍の尾を掴み、天を仰いで拱手する巍然たる裸形に、悪魔懲罰の決意を見る。これわが日本が、今從事してゐる世界改造の意氣を象つたものだ。お前が鬼であらうが魔であらうが、それは私の問題とする所でない。お前は千年の久しい間、興福寺の金堂内に、整然として亂れない姿勢を持して、重い燈籠を頭に載せて來た。そしてお前は、今後幾年たつても、お前の衰へない體力は依然として燈籠を頭から捨てないであらう。私はお前の使命が、永劫に引きつづく忍耐と戦闘力であることを知つてゐる。ああ、興福寺の龍燈鬼よ、お前は足が疲れ腰が痛んでも、體を横たへ休息することが出来ない。お前の頭は、燈籠の重量に堪へられない壓迫を感じるであらう。然しお前はそれを落すことが出来ない。使命は重大だ。そして使命は時と共に盡きる所あるを知らない。果しない使命を帯び



る鬼よ、私はお前を禮讃していいか憐んでいいかを知らない。
 龍燈鬼よ、私はお前の顔に、諧謔と宏量の閃めくを見て、お前
 が樂々と目的の遂行に當つてゐることを推度することは私の歡喜
 だ。私共日本人が、お前をもつて唯一無二の表徴となし、お前の
 態度に準じて、前進の路に就く時、私共は叫ぶであらう、『あ
 あ、不滅の燈火よ、否な眞理よ、汝は我等を導いて彼岸に至らし
 めるであらう。もとより我等に挫折なるもの無けれど、若し目的
 捨離の我等を強ひる時あらば、その時こそ、天地亡びて無に歸す
 るの時だ。』



新薬師寺伐折羅大將

私は新薬師寺の本堂を飾る伐折羅大將の外十一神將が、どうい
 ふ佛的存在であるかを知らない。私はただ彼等が、中央の圓形須
 彌臺壇上に、本尊をめぐつて配置されてゐる以上、皆な心を一つ
 にして、惡魔調伏に就いてゐることを知つてゐる。然し私の重大
 な關心事は、これ等武將が肘を張り、腕を延ばして外敵を俯睨し、
 特に伐折羅大將の忿怒の相恐しく大口を開いて、飛附かんとする
 姿勢にある。私は伐折羅大將に、雷雨を呼ぶ怒張と勇躍の表徴を
 見るのである。この立像は、東大寺戒壇院四天王以上に力の表現



として、天平期の彫技を重からしめるものだ。

然し私はここに於て、藝術として新薬師寺の神將を論ぜんとするものでない。私はこれ等を通じて、耳に外敵膺懲の樂を聞き、大地に轟く聖戰の曲を稱へんとするものである。私は大口を開いて敵を食はんとする伐折羅大將に、惡魔を蹴る意志の爆發を見、忿怒の急調に接せんとするのである。否な、私は伐折羅大將を眺めて、昭和十六年十二月八日、宣戰布告に際し、わが國民一億一心の忿怒を追想せんとするものである。

私共は實に、伐折羅大將となつて米國を眞珠灣に撃つた。また米國をヒカリッピンから追拂つた。私共は伐折羅大將の火焰となつて、天を蔽ひ、廣く南に延びてマライやジャワを征服した。私共は一網打盡に米英を屠つた……私共は、正義の炎でありまた創造の噴出、力の氾濫だ。私共は今日、私共の前進を邪魔するもの



なく、私共は光明となつて、眠れる東亞の神祕を復活せんとしてゐる。私共は誤れる人生を是正し、希望の實在を證明して、私共の企圖の正しきを示さんとしてゐる、これ皆な伐折羅大將が忿怒の賜物でなくて何であらう。

伐折羅大將の大口は叫んでいふ、『私慾に淫して天を罵るもの、皆な一呑だ、温順にして己を律するもの、皆な我が友だ。人若し我が忿怒だけを知つて、平和の微笑を知らないならば、本當に我を了解しない憐れな一寸法師だ。』



銅よ鐵よお召しだ

不發の死丸が轉がる、

どこに轉がる……

諸君の家の床の間に轉がる居間に轉がる。

死丸、いな銅製の布袋よ、私は君が支那生れだと聞いて

ゐるが、

いつ歸化して、安住を日本の家庭に得たかを知らない。

君が大きな袋にもたれて眠つた恰好は悠々閑々だ、



だが今私は君の慢性懶惰を寸断して、

君を一つの生丸に鑄代へ爆裂させねばならない。

また鐵の火鉢もだ、君は奴隸のやうに柔順だつた、

寒冬の間私に侍つた君の態度は謙遜だつた。

今日庭の櫻は散つて、君が私への奉仕は終つた、

だが君の落着く先は物置でもなければ押入れでもない……

兵器の工場は君の來るを待つてゐる、

國家が君に要求する所は憤怒だ、

君は死の叫音を作つて報國に就かねばならない。

陛下のお召しだ、千年の靜寂を動に代へよと仰せられる。

日本の國中家並みに生丸が飛びだせば、

猛然たる彈丸一億の唸りを作つて、

天地を聖火の網で張り廻し、



不死の陣を築くであらう。
 どこに一億の弾丸を抑へる征服者があらう。
 ああ、床の間や居間を捨てる時だ、銅よ鐵よ、
 諸君は神の息吹て體を焼き、
 必滅の魂に再生して起ち上る時だ。



樹木應召

斧は飛ぶ、
 陰を破る陽の發動、
 木は一齊に黙坐を捨てて現實に覺める。
 我等は斧に生の拍節を聞く、
 律動が谷から谷へ、
 飛鳥のやうに靜を碎き、
 拘束を斷つて更新に入るを覺える。



(動だ、動だ、動だ動だ！)
 ああ、轟然たる木の倒音、
 これぞ身を無にして國に甦る歡喜だ、
 破滅の彼方に新生を迎へる凱歌だ、
 これぞ犠牲の勝利、
 一死報國の躍動だ。
 私は幻に赤紙の空中に飛ぶを見る……
 檜の出征だ、樺の出征だ、松の木の出征だ。
 兄弟姉妹よ、道を開いて萬歳の津波を送れ、
 木遣音頭勇ましく彼等を稱へよ祝へ。
 彼等が帆柱を作つて、
 神風を運びゆく勇壯を想像せよ。
 我等は彼等が鐵の龍骨を作つて、



怒濤一丈を睥睨することを知つてゐる。
 ああ、天意守護の神木よ、
 卿等今征途に上る、
 誰か卿等の必勝無敵を論ぜんや。



梵鐘應召

市内の寺院一齊に梵鐘を國家に提供し、
昭和十七年十一月十四日正午を期して名
残りの鳴鐘を響かせる。

お前は嘗て、梵鐘よ、
朝日に滑つて田野に妙音を播いた。
お前は嘗て谷間へ夜陰を縫つて忍込み、
信仰を讃唱して、
道に彷徨ふ巡禮者に彼岸を教へた。
お前は嘗て幾千年の遠い昔の法を説いた、
お前は嘗て沈黙を破つて、



都ての遊戯が終つたことを叫んだ時、
私共は思ひに沈み塵を離れる歡喜を知つた。
梵鐘よ、
お前の聲は厳しかった、でも慈悲深かった、
私共はお前が善智識の祕傳に觸れた、
そして極樂の美德を學んだ、
私共はお前に永劫の消息を讀んだ。
だが今お前は、梵鐘よ、
寺院の靜寂を捨てて樓門を下つた、
そして下界の雜音と争鬭に挺身した。
ああ、何といふ悲壯な心氣の一轉だ、
お前は永劫を側に置いて瞬間、否な現實に殉ずるに至つ
た、



お前は自己を抹殺して私共と苦痛を分けるに至つた、
梵鐘よ、
お前は古い釋迦の法を捨てた、
後生の連鎖を切つた、
だがお前の決意に、否なお前の悲痛な現實に、
新しい信仰と歡喜がないと、ああ、誰が斷言しよう。
誰かお前が名残りの鳴動、
否な、應召の歡呼に、
殉國報恩の叫びを聞かないものがあらう。



脱皮の凱歌

私が個を捨てて全を拾ふ時、
私の感情は一瀉千里だ。
私が思想を禮讚に代へる時、
私の情熱は疾風雷雨だ。
私は長い間文字の迷宮を廻つて、
永劫の華麗を求めた、
また私は獨室の壁龕に坐して、



自負の酒杯を酌んだ……
ああ、それは今過去の記録に過ぎない。
私は民衆の登音の私を招くを聞く、
私は筆を投げて剣を掲げる、
私は街上の綜合に和せざるを得ない。
私は敢然として『私』を排し『公』の門に突入する、
私は高らかに脱皮の凱歌を唄はねばならない。
私は一単位として祖國の目的に参じなければならぬ、
私は行進曲を合唱して旗を振る、
私は喇叭を吹く、太鼓をたたく。



萬法流轉

火は私を焼くことが出来ない、
水は私を溺らすことが出来ない、
風は私を弄ぶことが出来ない、
金銀瑠璃は私を迷はすことが出来ない、
悪鬼羅刹は私を毒することが出来ない。
私は敵の刀杖が二つに折れるを知つてゐる、



私は敵の智謀が空なるを知つてゐる、
 私は敵の鐵鎖が錆びるを知つてゐる。
 私は空氣のやうに物體でない、
 人は私を太陽の光線のやうに握ることが出来ない。
 神は私に無限を與へ給ひ、
 絶對の深奥に坐らせた。
 ああ、私は萬法流轉の理を體し、
 甚深無上の祕を攝受して、
 大義と共に虚空に漂ふ。



陣形

私は空中へ點を線をばら撒く、
 そして勝手次第にそれを結付ける、
 この時私の陣形は出来あがる。
 私の注意することは、自然の大法を破らない、
 即ち太陽に挑戦しない一つだ。
 人は私を放膽だと評するであらう、
 だが私は自分が細心であるを知つてゐる、



若し私が人に我儘者に見えるならば、
それはその人自身が我儘者であるからだ、
人は他人に自分を見出して發見だと囃してゐる。
私の企畫は人を教へることでない、
鳥は唄ふが教師でないやうに、
花は笑ふが娼婦でない、
私もまた花のやうに自分に忠なるを知つてゐる。
私の人に願ふ所は好意慾を失はないことだ、
私の恐れる所は理窟に迷はされないことだ、
そして私の欲する所は非常識になることだ……
なほ祈禱が非常識であるやうに。
私は祈禱の間に企畫を進め、いろいろと陣形を代へてゆく。



永劫の天兵

永劫の天兵、ああ、人生よ、
お前は進軍と凱歌だ。
お前の戦略は空間を一點に集め、
お前の猛打は光線の渦を作つて、
時間を立派に摺伏する。
お前は悲痛だが勇健だ、
お前の頭髮は亂れる、



お前の四肢は丸だ槍だ、
お前は恐怖を知らない。
ああ、人生、永劫の天兵よ、
お前が翻す運命の旗は、
お前を名譽の終極へ驅りたてる。
お前は進軍だ、
お前は戦ふ、
お前は凱歌を上げる。
消耗が何だ、
骸骨の山が何だ、
お前は血の大河を渡る、
お前は血の驟雨に浴びる、
永劫の天兵、ああ、人生よ、



お前の血管にどよめくは何だ、
それは祖先の古い頌歌だ、
お前はその旋律に答へて踊る。
お前の踊は大地の滑走だ、
天空の飛騰だ、
お前の曲は戦闘の曲だ。
ああ、人生、永劫の天兵よ、
お前の百戦果は千戦果となつて、
お前はその數だけ凱歌を重ねる、
そして限りなき歴史へ勇躍し往く。



心境

表現を禮讃にのみに限つたことは、
私を一つの言葉へ推込めて呉れたことは、
本當に有難い、
誰が理知の中止は蠻的行爲だといふ、
誰が想像の羽を斷ち切るは殺人犯だといふ。
人は私にいふかも知れない、
『お前は憐れな鳥だ、



足を現實に縛られ、
竹の鎧戸を透かして空を眺め、
籠を離れて飛ぶことが出来ない。
お前は人生の光榮を教へられたではないか、
お前は詩人の呼氣を與へられたではなかつたか。』
私は今三であり五である豊富な言葉の資産を捨てて、
ああとおおの貧しい歎聲しか出せない啞の子になつたか
も知れない。
私は自分だけの貝殻に世界を作るために、
もつと大きい廣い世界を閉ぢたかも知れない。
だが私は獨善の墓場を掘つてゐるのでない。
私は制限の刺戟にのみ酔つてゐるのでない。
私は今人生の凡てを、おおとああの簡素な一つの言葉で